

## 京のラクチャリ

安藤晃二

四月上旬、米国より息子が単身一時帰国した。親の海外勤務に翻弄された末、現在は独立してカリフォルニアに永住している。急遽その京都市行きをヘルプしようと、同道することにした。京都タワーが青空に映え、冷気に心が洗われる。三条のホテルロビーにごった返す人々、ここが日本かと紛う程欧米人ばかりだ。タクシー運転士曰く「わたしらには解りませんが、よう来やはりますなあ、規制が緩んで中国から来始めたらもう大変ですわ」

翌朝、息子の京都観光計画が始動する。近くの「京のラクチャリ」レンタル店へ。登坂、降坂用電動アシスト車がぎっしり並び壯観だ。高揚している客のブラジル人と会話する「昔は横浜からサントスやリオへ船を送ったものです」、「次は私の町リオへ是非觀光に来てください」。チャリは夫々の方向へ発車する。

息子が先導、下の鴨川へ降りる。感動的な静寂があった。川沿いの道は人も殆ど歩かず、楽々と走れる。速い流れの水音を聞き、芦原の先の中洲に大きな青鷺が一羽、あの独特の直立姿勢で動かない。対岸に先斗町の川床料亭群が見える。一羽の鷺が急降下、それを合図に数羽が現れ空中戦の体だ。チャリの捉える自然の景に、爽快感を覚える。五条の辺で上に上がり清水へ向かう。坂を埋める人込みに弾かれて、隣の茶わん坂に回ると「ラクチャリ駐輪場」とある。やはり見物は徒歩で、という事か。坂は着物姿の紅毛碧眼の美女達で賑わう。弁天から祇園南の街を歩き高台寺を訪ねる。オーガスタを彷彿とさせるが、新緑の寺の古木に寄り添う純白の石楠花に圧倒される。

チャリは、東大通りを走り。息子は「哲学の道」の駐輪場から銀閣へ行くと言う。彼のスマホには京都情報がぎっしり、それ処か、一日早く帰る。パパのスイカに新幹線予約・支払いまで、ピッピッと仕事が早い。ホテルの清算も済だという。パパの付き添いは全くヘルプにならず、夜、木屋町通りの板前や女将とおだを上げ、財布を取り出すのが精々であった。

(二〇二三年五月十一日)